

- 4) 江原昭善 (1983) : 人類学からみた殺人の論理。講談社「本」5月号
- 5) 瀬戸口烈司 (1983) : リスザルの歯列にみられる性的二型 — 亀井先生のコメントへのリプライをかねて —。季刊人類学, 14 : 29-45。
- 6) 江原昭善 (1983) : 上記論文(5)へのコメント。季刊人類学, 14-49。

論文

瀬戸口烈司 (1983) : ホエザルの上顎臼歯の個体変異と臼歯の構造から見た南米ザルの系統。人類学雑誌, 91 : 1-10。

報告

- 1) 江原昭善, 木下 実 (1983) : 朝日遺跡 SX-2号墓出土の人骨について
愛知県教育委員会
- 2) 江原昭善, 木下 実 (1983) : 緒川城跡出土の人骨
東浦町教育委員会編
- 3) 江原昭善, 木下 実 (1983) : 愛知県一宮市法円寺遺跡にて収集された中世火葬骨について。
- 4) Setoguchi, T., et al., (1983): La Dentina Superior de *Stirtonia* (Ceboidea, Primates) del Mioceno de Colombia. Kyoto Univ. Overseas Res. Rep. New World Monkeys, III.: 1-11.
- 5) Aimi, M., et al. (1983): Morphological variation of the crab-eating macaque, *Macaca fascicularis* (Raffles, 1821), in Indonesia. Kyoto Univ. overseas Res. Rep. Studies on Asian Non-human Primates : 51-55.

学会発表

Setoguchi, T. (1982): Relation between Morphology and Function of the Dentition in the *Stirtonia-Alouatta* Lineage (Ceboidea) IX-th Congress of the International Primatological Society, Atlanta, USA.

瀬戸口烈司 (1983) : 「サルの墓場」の発見。
第27回プリマーテス研究会。

幸島野外観察施設

川村俊蔵 (施設長・兼)
渡辺邦夫

幸島野外観察施設は昭和43年に新設されて以来十数年を経過し、観光客の増加等の問題はあるにしても、安定した運営を続けている。昭和57年度に本施設を利用した研究者は延べ139人であった。

群れの概況としては、主群・マキグループ共にほぼ安定したまとまりを保ち、この状態が定着している。島内の個体数は前述したマキグループ15頭を含め、58年3月末現在94頭である。57年度中の出産は11例であるが、うち5頭はその後死亡している。

一昨年頃より幸島のサルが浜に放置された魚を食べる行動がよくみられるようになったが、58年3月14日の時点で30頭以上にひろがっているのが確認された。特に冬場に顕著に見られ、夏場にはほとんどみられないことから、栄養面での過不足が生じているのかもしれない。体に釣り糸をつけた個体もみられるに至っており、何らかの対応にせまられている。

この夏には島との間が非常に接近し、歩いて渡れるまでになったが、秋の台風で地続きになることはまぬがれた。しかし、毎年島と地続きになる可能性はさけない状態であるといえよう。

本施設は57年度いっぱいでは拡充改組され、従来の研究林とともに、ニホンザル野外観察施設として、再出発することになった。また長年本施設の運営に多大の協力を負いられなかった時任岩助氏が58年4月26日、天寿を全うされた。御冥福を祈りたい。

研究概要

1) 幸島のサルの生態学的社会学的研究

渡辺邦夫, 三戸サツエ

山口直嗣, 冠地富士男

従来からの継続として、ポピュレーション動態に関する諸資料を収集し、定期的にはほぼ全個体の体重を測定している。また集団内でおこったトピカルなできごとや、通年の変化について分析をすすめている。

2) セレベスマカクの社会生態学的研究

渡辺邦夫

昭和56年度に行ったインドネシアでの調査をも

とに、研究のとりまとめを行った。

報 告 等

- 1) 渡辺邦夫 (1982) : スラウェシのムーアモンキー, モンキー 184 : 6-13.
- 2) Watanabe, K., and E. Brotoisworo (1982) Field observation of Sulawesi macaques. Kyoto University Overseas Research Report of Studies on Asian Non-Human Primates, 2. pp.3-9.
- 3) 渡辺邦夫 (1983) 闘争における連合, 遺伝, 37巻4号 : 17-24.

ニホンザル研究林

研究林実行委員会

本研究所には幸島野外観察施設があり、草分け時代からすれば、すでにほぼ30年の研究史を有し、完備した個体追跡資料を拠り所に、多彩な研究がつけられてきた。その学問的寄与は甚大であり、今後さらに発展が期待される。しかし一方ニホンザル本来の生息条件からすれば、孤立した1群が約30ヘクタールに生息するという箱庭のサンプルであることは否めない。多くの群れが連続分布し、群間関係をふくむ多様な生活が営まれるところこそ、ニホンザルが進化をつづけ、適応している舞台である。

幸島以外でも、高崎山・嵐山はじめ多くの野猿公苑、また餌づけされない純野生群についても観察等が行われ、相補って研究を発展させてきた。しかし野猿公苑は、一部を除いて研究者の管理外にあり、餌づけという条件以外にも、無数の限界があった。一方純野生群は、近年の森林開発と、それに関連する害獣化のもとに、年間捕殺数2000頭という数字が示すように、まことに不安定な状況におかれ、計画的研究が保証されない。

かかる状況下に、典型的なニホンザル生息地を、その生息環境とともに確保し、理想的な半永久的研究を可能にすべきだという、切実な願望がおこり、この研究林構想が打ち出された。

対象にしたのは、管理が国の責任で行われている国有林とし、ニホンザル分布の北限である下北、南限である屋久島、そして中核部としての中部、これには多雪の裏日本型を代表する上信越、群雪

の表日本型を代表する木曾を選び、計4地点がとりあげられた。それとともに各地点での準備的研究も開始された。

本計画は、頭記名による研究施設の準備段階として、1973年から特別事業費をえてすすめられてきた。1973年(昭和48年度)に下北、1978年(昭和53年度)に上信越、1981年(昭和56年度)に木曾の各研究林について予算がつき、共同利用研究所施設運営費として計上されるようになった。

幸島野外観察施設を発展解消し、5カ所から成るニホンザル野外観察施設を設けることは、本研究所の重大な任務であり、将来の野外研究の軸を形成することであると、決意ならびに抱負を抱いている。

昭和57年度におけるニホンザル研究林関係の活動状況は次のとおりである。

1. 下北研究林

'82年12月10日から'83年4月10日までの期間に延べ107日間、全国各地から約40名の参加をえて、北西部の地域個体群を対象に、群れの遊動の追跡、個体数、構成、食物、群間関係などに関する集中調査を行なった。

その結果、地域個体群全体の個体数が初めて明らかになったほか、既知のM、Z、I群以外第4の群れ(Y群)があること、ポピュレーションの性、年齢構成、行動域、及び行動域のシフト(I、Z群)など多くの重要な知見をえた。

2. 上信越研究林

横湯川流域の seed trap による果実生産量・植生調査及び志賀C群の生態調査がひきつづいて行なわれた。又、春、夏の食物の栄養分析も継続して行なわれた。

研究林に隣接する雑魚川上流域における観光開発に対して監視が続行された。

3. 木曾研究林

田中 進(共同研究員)、泉山茂之(研修員)との共同研究として、従来からの群れの連続追跡が行なわれた。4月に上松町当局によりT群約60頭が捕獲されたが、そのうち8頭と、飼育中に生れた1頭、計9頭をもとの生息地に放ち、群れとしての存続を果たした。その後M群約15頭が、11月頃から、弱体化したT群の生息地の一部に移り住んだことが推定されている。大型のK群とS群に関しては変化がおこっていない。

猿害対策としては、感応式つまりサル自体がス